

國語研究

伊勢物語のキツについて

— 平田篤胤説の再吟味 —

橘 正 一

むかし、男がみちの國に、すずろに行つた。その女が、京の人が珍らしく思はれただらう、せちに思ふ心があつた。さて、かの女は「なかなか、戀に死なずは、くはこにぞ成るべかりける、玉の緒ばかり」と歌を詠んだ。男は、この歌のローカル・カラーに感動して行つて寝た。その夜、鶏が宵鳴をした。男は「もう、夜が明けたと見える、かうしては居られん」と言つて出て來た。女は恨んで、

夜も 明けば きつに はめなむ くだかけの ま  
だきに 鳴きて せなを やりつる  
と歌を詠んだ。

右は、伊勢物語の一節である。この歌の意味は「夜が

明けたら、水槽に打ち入れてくれよう、腐れ鶏め、暗い内から鳴いて、見さんを逃がしてしまつたよ」といふのである。鶏が宵鳴するのは不吉である。この際には、その鳥に水を浴びせれば善いといふ土俗は、今も各地にある。

かう判つてしまへば何でもないが、これだけ判るのに徳川時代の學者は、非常な苦心をした。それは、一つには、第二句の「はめなむ」が、流布木に「はめなで」となつて居たためもあるが、それよりも、肝心のキツといふ言葉の意味が判らなかつたためである。て、色々頭をひねつたあげく、キツは狐だらうと言ふ事になつて「鶏を狐に食はせよう」といふ珍解釋を發明して、それで判

「たつもりでゐた。所が、江戸も終り頃になつて平川爲胤が秋田から出て、郷里の方言によつて、この難問を見事に解いた。その説に曰く、

「おのれが生土の出羽の秋田わたりにて、太き丸太鑿て作れる水槽をキツといひて、人家の門に居置て、常の用ひ水とする所あり。老人に問ふに、此キツむかしは、おほかた家毎に門に居置くらひなりつるが、近きころ、やうやく、大瓶などを用ふる事となり、又其をだに置かぬ家も多くなりて、今はキツある家はまれなれば、其名だに知らぬ人はた多かめりといへり。これ古き東語にて、きつにはめなでの歌は、もしくは鶯をそのキツてふ器の水中にうちはめむと言へるにはあらじか。」

伴信友は、この話を聞いて、鬼の首でも取た様に喜んでそれからと言ふもの、奥羽の人と見ると、逢ふ人ごとにキツの事を聞いた。中には無いと言ふ人もあつた。知らないといふ人もあつた。板を合せて作つたものをキツと言ふと答へた人もあつた。秋田の人、高橋貞房に聞いた所、爲胤の言ふ所と、そっくり同じで、信友を喜ばせたいつか、下野の日光に行つたとき、家の門に、板で造つた水槽を据ゑてあるのを見つけた、「これだな」と思つて、

「姉さん、それは何といふものですか」と聞いた所「水ためてございます」と言はれて、がっかりした。そんな事を「比古婆衣」の中に書いてある。信友は、また「はめなで」は誤で「はめなむ」の正しいこと、ハムといふ言葉は近頃の俗語ではないことなども考證してゐる。

問題はこれで解決した様なものだが、なほ、キツといふ言葉の分布や轉訛や轉義は未解決のまま残されてゐるこれを明かにする事は、昭和の方言學者の義務でもありまた特權でもある。

まづ、津輕は、北山長雄さんの「津輕語彙」によれば板製の四角な水槽をキチと言ふ。

これは指し物らしいが同地では、また、圓木に穴をあけ、水や秣などを入れる物をキツと言ふとの報告もある（青森縣方言訛語）

「東北方言集」によれば、津輕では、水溜ばかりでなく、秣などを入れる箱をもキツと言ふし、青森縣の舊南部藩領では、米櫃をキツチといふ。能川多代子さんによれば、青森縣三戸郡五戸町でキツツまたはキツチといふのは、底のある木箱ばかりでなく、屋外の水の湧き出る場所などに据ゑる非戸わくの様な底の無いものもいひ、また、洗濯用に、底のある大きな箱を土中に埋めて、樋

で水を溜るものをもいふと。特別の稱呼としては、ミツギッツ（四角な水桶）コメギッツ（米櫃、角箱）サカナギッツ（魚桶、一般に楕圓形）などがあるさうだ（方言と土俗、三卷一號）ギッツと濁る所もある。

盛岡市では、むかし、薬所に、瓶の代りに、キッツといふ大きい四角な箱を備へつけて置いて、之に水を入れた。小木村司氏の「盛岡方言考」に、

「こゝにて水瓶は不<sub>レ</sub>用。木にてさし、水を入れるを水きつといふは、古今著聞集「近代節會、なにも、上達部物をくはれぬこと、いはれなき事なり。三條左大臣入道内辨のとき、きつにとりて、めし玉ひけるを、識者のし玉ふことなれば、やうぞ侍らん」とあり。きつは米櫃の略にや。」

とある。しかし「古今著聞集」のキツは食器であるらしい。

盛岡でも、今は、キッツを使ふ家は稀になつたらうと思ふが、湯屋の風呂場にある浴槽や岡湯の槽も、やはりキッツである。八重樫さんの「岩手縣釜石町方言誌」にも、キッチを木槽（浴槽にも）と譯してゐる。盛岡ではまた米櫃をコメゲツといふ。コメギツの訛である。岩手縣の「遠野方言誌」にもキッツを米櫃、穀櫃と譯してゐる。

る。盛岡附近の田舎に行くと、大便所の糞を受けるのに糞の代りに、木の箱を置いてある。これをツボギツといふ。福田裕さんによれば、秣桶をキッツといふ所が盛岡近在にもあるといふ。

同じ岩手縣でも、舊仙臺領に属する東磐井郡のキッツは板倉である（全國方言集）鹿野郡のキッツは「物置」と報告した人がある。「仙臺方言考」には「きつ」を「物置米倉ノコト」と註し、同じく考異には「木倉」としてある。土井八枝さん（晚翠夫人）の「仙臺方言集」には「きつら」を板藏とし「登米郡史」にも、キッチを板倉としてある。

平田篤胤の故郷である秋田縣はどうかといふに、ここは、水槽と板倉と二た通りの用法がある。大體、北の方は水槽、南の方は板倉で、平鹿郡は交錯地である。即ち「秋田方言」に、仙北郡のキッチは水槽、平鹿郡のキッチは、厚板にて箱のやうに作り、水などを入れるもの、平鹿郡のキチは板倉、雄勝郡のキッツは板倉とある。また仙北郡、平鹿郡のマジキッツ（松きつ）は、水屋（薬所）の水槽とあり、雄勝郡のコメギツは米櫃とある。

篤胤は、幸、水槽領に生れたから良かったが、もし、板倉領に生れたら「伊勢物語」のキツは板倉であつて、

これは、板倉に鶏を監禁しようといふ意味であるなどと言、たかも知れない。いや、事實、仙臺の藤原相之助さんなどは、そんな風に解釋してゐる（仙臺方言集）方言の分布の調査を怠つて、ただ自分の故郷の方言一つだけで、古書を解かうとするのは危険であるといふのは、かういふ事があるからである。

東北地方では、青森、岩手、宮城、秋田の四縣の外には無い。山形縣や福島縣にも有りさうなものと思つて、探してみたけれども、見當らなかつた。東北地方以外では、茨城縣の最北端の多賀郡にキツがある。『茨城縣方言集覽』に「木櫃」と譯してある。

青田澄夫さんによれば、新潟市の附近では、厚板にて作れる水槽で、川魚などを飼養しておくものをキツといふ（國語教育）、「越後方言集」によれば、南蒲原郡では魚を入れる箱をキスと言ふ。これはイケスに音が近い。岩船郡では、之をナギツといふ。ウヲギツ、又はサカナギツと言はずに、ナギツと言つた點、よほど古風であるこの言葉は佐渡には無い。結局、越後南蒲原郡と常陸多賀郡とは現在、日本に於けるキツ領の最南端である。しかし、キツの意味を水槽に限れば、その南限は、サツと上つて、備前領と南部領との國境をいふ事になる。すな

はち、同じキツでも、仙臺は板倉、南部は水ぶねで、意味がちがふ。『伊勢物語』のキツは、無論、仙臺式ではなくて、南部式である。しかし、かう言つたからとて、私は、在原業平が今の盛岡あたりまで來たらうといふ事を主張しようとする考は少しも無い。『伊勢物語』は、史書でなくて、歌物語である。歌物語の主人公の史實を論ずるなどは見當違ひである。みちの國の女の歌といふのも、實は、京都の物好きが、戯れに、机の上で詠んだものかも知れない。『伊勢物語』には、あづまの話はたくさん有るが、こゝに限つて、陸奥としたのはどういふ譯だらう。これは、クハコヤキツが陸奥方言だからではあるまいか。少なくとも『伊勢物語』の作者は、これを以て陸奥方言と認めて居たからではあるまいか。とにかく、この言葉は、ここ以外には見えないから、當時の京都の日常用語であつたとは認めにくい。もし、これが果して方言だとすると、『萬葉集』の東歌に尋ぐ古い方言資料だといふ事になる。しかも、その分布の區域が、千年前も千年後も、ほとんど變りの無いのも不思議である。

水ぶねのキツが北奥にだけ残つたのは、氣候上の理由が大いに有ると思ふ。水廻は、耐久力にも富み、便利でもあるが、冬季、水の凍る様な寒い國には向かない。實

は、私などは、高等學校時代、仙臺に出て、始めて水ため用の大甕を見たものである。仙臺と盛岡とは、確に寒さがちがふ。仙臺では、蓋さへしておけば、寒中でも瓶の水はほとんど凍らないが、盛岡では、かうは行かないだらう。この氣候上の相違が、一方をして、水甕を採用させ、一方をして、それを躊躇させた理由かと思ふ。さて、水甕を採用した後の不用となつたキツはどう處分されたらうか。邪魔だと言って、割つて薪にするには惜しい。そこで、ある家では、之に米を入れ、ある家では之にガラクタを入れたらう。米櫃には大き過ぎ、ガラクタ箱には小さ過ぎる。そこで、今度作る時には、米櫃用は小さくし、ガラクタ箱用は大きくするといふ風に、それぞれの使用道に従つて、大きさや形に變更を加へたのだらう。かくして、或は米櫃、或は板倉、或は水ぶねといふ風に、用途や外見は、全く別々の方向に分化して行つたが、ただ、名前だけは、昔のまま、キツと呼んでゐる。かう考へて來ると、仙臺のキツも、今こそ板倉となつてゐるが、かつては、水ぶねとして使はれた時代があつたことを想像してよからう。岩手縣でも、秋田縣でも、北の方は水ぶねで、南の方は板倉である。これは、水瓶の使用によるキツの變質が南の方から始めて、追々、北上した事を語るものであらう。

近頃の手桶からバケツへの移り變りは、キツから水瓶

への移り變りに似た所がある。ブリキは熱の良導體だから水瓶以上に英國には不向きだ。實は、私などは、東京では、バケツで水を汲むと始めて聞いたとき、奇異の感に打たれた。盛岡では、バケツは、板を拭く時、雑巾の水を容れる器としてしか使はない。だから、バケツと言へば、汚いものと思ひ込んでゐる。その水を飲むと言ふのだ、便所の手水鉢の水を飲むといふのと同じ様な感じがして、半分はあきれ、半分は輕蔑したのは無理もない。私は、ここで、石川啄木の小説「天鷲絨」を思ひ出す。盛岡附近の農村の娘が二人、家を抜け出して、東京に出て、床屋の二階に落ち着く、あくる朝「水を汲んでおいでなさい」と、おかみに言はれて、ハイと藥所に行つてみたが、手桶がない。まごまごしてゐると、「そこに有るぢやありませんか」と指さされた所を見ると、バケツがある。そこで始めて東京ではバケツで水を汲むといふ事を知るといふのだ。啄木自身の經驗であつたかも知れない。キツをキビツの訛と考へる傾向がある様だが、この考へ方には賛成できない。キツもヒツも木製にきまつてゐる。鐵だの銅だのブリキだの、アルミニウムだの言ふキツやヒツがあるわけではない。だから、特に、木の櫃と限定する必要はない。その上、キツは千年前の古語である。ヒツがそれよりも古いといふ證據が無い限り、キツは親、ヒツは子と考へる外はない。

(一九)